

日本現代文學全集 70

中野重治
小林多喜二
集

講談社

日本現代文學全集

70

中野重治・小林多喜二集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷

昭和38年8月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著 者 中 野 重 治
小 林 多 喜 二

製 版 置 川 征 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株 式 會 社 講 談 社

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 株 式 會 社 國 寶 社

東 京 都 文 京 區 音 羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電 話 東 京 03 (945) 1111 (大代表)

販 替 東 京 8 - 3 9 3 0

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106702-2253 (2)

(文1)



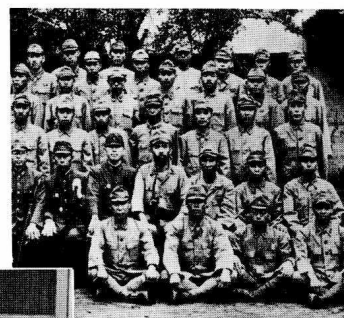
昭和三十八年六月十九日 世田谷の自宅にて 中野重治



↑昭和十年五月
宮本百合子が検
挙された時留守
宅の片付けに集
まつた友人たち
前列右から 柳
瀬正夢 原泉
戎居仁平治 山
田きよ 窪川鶴
次郎 林真澄
壺井繁治 後列
右から 中野鈴
子 佐多稲子
壺井栄 松山文
雄 重治



↑昭和十五年頃 日曜
会の時 前列右から
倉橋弥一 徳永直
田畑修一郎 宇野浩
二 間宮茂輔 矢崎
弾 石光俊 後列右
から 重治 高島正
新田潤 野口富士男
渡川 田辺茂一
↑昭和十六年一月 郷
里の家にて 右から
妹 鈴子 母 とら
長女卯女を抱いた妻
原泉 妹美代子の長
女 清美 重治 父
藤作 妹 美代子



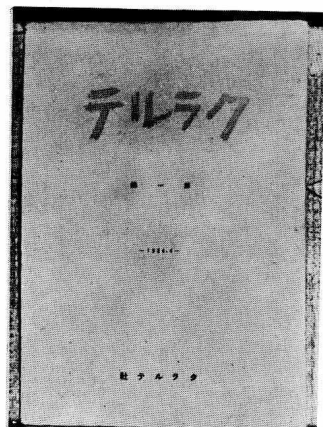
↑昭和二十年
年夏 長
野県小黒
郡東塩田
小学校に
て 最後
列右から
四人目
重治

←昭和二十九年「尾崎一雄作品集」
出版記念会 日比谷 山水楼にて
テールルの向う側右から 檀一雄
谷崎士郎 滝井孝作 尾崎 雄
谷崎精二 青野季吉 保高德蔵
坪田譲治 川崎長太郎 外村繁
立てるは重治 席順に右手へ 中
山義秀 上林曉 井伏鱒二 三好
達治 中谷孝雄 永井龍男 写真
手前左から二人目 上野壯夫

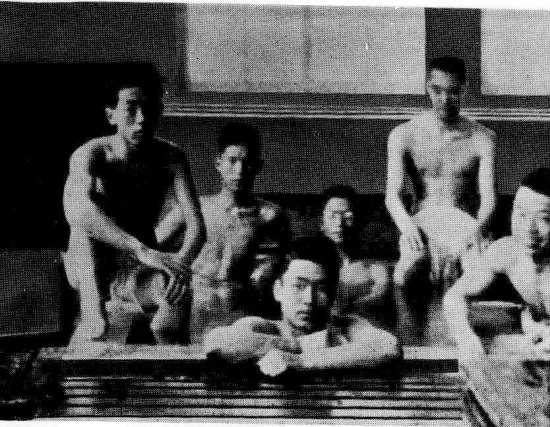


昭和六年秋頃 杉並区馬橋の家にて 小林多喜二

←多喜二が高商時代の友人と発刊した同人雑誌「クラルテ」（大正十三年四月創刊）



←北海道拓殖銀行小樽支店に勤務していた頃
定山溪温泉にて 左端 多喜二



→「防雪林」ノート稿

←昭和三年二月 普通選挙法最初の国会議員選挙に小樽から立候補した山本懸蔵の選挙事務所所面のピラ 多喜二は応援のため東俱知安方面の演説隊に加わったがのちの作品「東俱知安行」にこのピラがそのまま取り入れられている



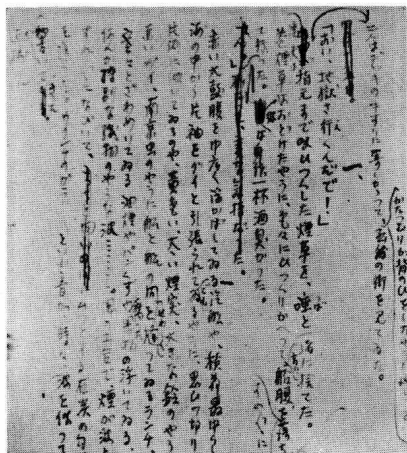
→「一九二八年三月十五日」執筆
の頃 若竹町の自宅にて

←「一九二八年三月十五日」ノート稿



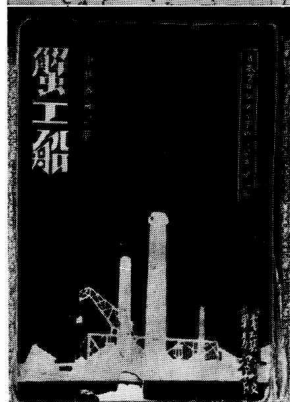


←昭和五年 日比谷五番館ビルにあった戦旗社にて
前列右から 壺井繁治 上野壮夫 多喜二 村田
恵 後列右から 宮木喜久雄 猪野省三 古沢元



↑「蟹工船」ノート稿

←「蟹工船」表紙（昭和四年 戦旗社刊）



→昭和八年二月二十二日午前一時頃 馬橋
の家で多喜二の遺体を囲む友人たち 前
列右から 原泉 田辺耕一郎 上野壮夫
立野信之 山田清三郎 鹿地亘 二列目
古から 岡本青貴 一人おいて 岩公享



→昭和十年二月二十一日 多喜二を偲ぶ会 神田 大雅楼にて
右から 蔵原終子 蔵原惟郭 弟 三吾 母 セキ 妹 幸 宮本
百合子 山田きよ 河野さくら 後列右から 柳瀬正夢 上野壮夫
米谷 その後 藤森成吉 村山壽子 その後 中野重治 渡辺順三
壺井栄 工口典 中野鈴子 生江建次 川口浩 佐多稲子 立野信

→明治四十年十二月末 秋田から北海道小樽へ移住した時の記念撮影 前列右から一人おいて 多喜二 一人おいて 姉 チマ 妹ツギを抱いた母 セキ 後列右から二人おいて 伯父 小林慶義



→明治四十二年頃 右から 妹ツギ 姉 チマ 多喜二



↑大正七年頃から参加した小羊画会 右から 高桑市郎 西村羊三 灰野文一郎 木下鳳一郎 斎藤次郎 多喜二



→小樽高等商業学校時代 若竹町の自宅にて 右から 母 セキ 弟 三吾 父 末松 幸 多喜二





→昭和三十一年 「新日本文学」講演会の途次 北海道にて 右から 重治 佐藤藤吉 小林セキ（小林多喜二の母） 西野辰吉 佐藤チマ（多喜二の姉） 一人おいて 金達寿



↑昭和三十一年十一月 中国訪問の際 西湖湖上にて 山本健吉と



→昭和三十六年三月十日 アジア・アフリカ作家会議東京大会の際 左から 野間宏 堀田善衛 青野季吉 佐多稲子 後列右へ順に 亀井勝一郎 重治 阿部



→昭和三十六年春 日本を訪問したソヴェートの作家たちと丸の内にて 右から イワーノフ ゴンチャール その後の顔ミハイロフ リウオ



↑明治四十二年
六月 福井県
坂井郡第三高
等尋常小学校
二年の時最
後列左から二
人目 重治

→明治四十年三
月 右から
重治 祖父
中野治兵衛
從兄 水野燭
一(現在 坪田
新太郎)



→大正八年 第四高等
学校入学の年 時習
寮にて 前列右端
重治



↓昭和九年夏 四
谷大木戸の家に
て 右から 重
治 妹 鈴子
父 藤作 妻
原泉



→昭和四年
「戦旗」防衛講演会
治会館にて 壇上中央 重治
上野自



中野重治集 目次

巻頭写真

筆 蹟

春さきの風	五
鉄の話	一〇
村の家	一六
汽車の罐焚き	三
歌のわかれ	七
五勺の酒	二四
むらぎも	二九
広 重	二六

荒れた屋敷	二六
-------	----

萩のもんかきや	二九
---------	----

作品解説	平野 謙 三〇
------	---------

中野重治入門	小田切秀雄 三七
--------	----------

年 譜	四四
-----	----

参考文献	四七
------	----

小林多喜二集 目次

卷頭写真

筆 蹟

防雪林……………二九

一九二八年三月十五日……………三三

救援ニュースNo. 18 附録……………三八

独 房……………三六

母たち……………四〇

党生活者……………四七

作品解説……………平野 謙 四〇

小林多喜二入門……………小田切秀雄 四七

年 譜……………四七

参考文献……………四六

中野重治集

リサの日記

まののしげはる

「吉原へのバス」
 かいしき遊覧がある。よーい、
 あ、バス停場へ行く。旅へいざ

つた

つて

といたホスリか「はいかかこい」
 あり、川あり、湖水あり、それから谷あり
 信原がある。そのどろどろ行つてみ
 かせてどろへ行くか。どろへ行つてみ
 いがどろへ行けぬ。どろへ行つて
 せ方があつた。行つてみる。行つてみる。
 かはる。どろ。どろ。どろ。どろ。どろ。
 う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
 といふ。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

春さきの風

三月十五日につかまつた人々のなかに一人の赤ん坊がいた。

朝の八時半ごろ、赤ん坊は父親と母親とに連れられて、六人の制服と二人の私服と一しょに家の前の溝板を渡った。夏場はこの溝板がごとごとというのだが、この時はすっかり凍てついていて悲しげなきしみ声を立てた。

十一人の同勢は電車道を歩いて行つた。誰も口を利かなかつた。曇り日で、彼らの足の下では霜柱が踏み砕かれた。五時から八時半までの家宅捜索の間に赤ん坊は十分に冷えていた。母親のふところの中で赤ん坊は泣き声を立てなかつた。警察の門へ曲る時ふいと顔を上げると、浄水場の堤防に咲いたかじかんだタンポポの花が父親の眼に映つた。

中へはいると直ぐ父親はどこかへ連れて行かれた。赤ん坊は母親と一しょに保護檻に入れられた。

そこに二人の淫売婦がいた。

このごろ子供を亡くした年上の方がしきりに赤ん坊を可愛がりたがつた。

淫売婦らは屋少し前に出された。淫売婦らは赤ん坊の頬べたをつついて二口三口お愛想を言い、母親には「お大事になさいますし。」と挨拶して出て行つた。

屋過ぎ仲間うちの検束者が十五六人はいつて来た。そのうちの女二人が保護檻に入れられた。

女らは赤ん坊を囲んであとあとの打合せを始めた。ひそひそ声であつたが、看守部屋が保護檻の鼻先にあつたため忽ちけんつくを喰つた。

「しゃべるな！」

赤ん坊がおびえて泣き出した。いくらどうしても泣き止めなかつた。

「どうしたのよう、この児は？」

母親は赤ん坊のからだ心が心配になり、それから悲しくなつた。最後に母親は決心した。

（泣かしてやれ。）

女らは赤ん坊の泣き声に隠れて辛うじて話した。

しかし母親が呼び出された。

赤ん坊はまだ泣き立てていた。それを聞いていると母親は、底冷えのする留置所の中でさえ鼻の頭に汗の浮くのを覚えた。

（けれど赤ん坊を連れて行つては二人に話ができなからう……）

母親は赤ん坊を置いて行くことにした。

附添いの看守が訊ねた。

「赤ん坊は連れて行かんのか？」

母親はちらりと看守の顔を見たが黙って出て行つた。

入れちがいに父親がはいつて来た。泣き声を聞きつけて彼は、保護檻の格子の外から赤ん坊の泣き顔を覗き込み、それから二人の女に会釈して便所わきの檻房にはいった。

陰気で退屈な留置所の午後が過ぎていった。一度看守がひどく猥褻な言葉で保護檻の女をからかった時、誰かが檻房の中から堪りかねて怒鳴つた。

「止せ、馬鹿！」

夕刻になつて母親は帰つて来た。二人が訊ねた。

「どうして？」

母親は胸をあけて乳房を含ませながらいった。

「さ、おっぱいにしようかね。」

ふいに母親は蒼ざめた。

母親は乳の出ないのを発見した。

同時に赤ん坊の様子のおかしいのに気づいた。

赤ん坊は機嫌が悪いくせに泣かなかった。おしゃぶりを含ませるとじきに吐き出した。母親は赤ん坊の小さなからだを揺すりながら呼び立てた。

「友ちゃん！ 友ちゃん！」

赤ん坊はけれど泣かなかった。額に手を当てると少しだが熱があった。

母親は医者を呼んでもらおうと思った。

「医者を呼んでくれませんか？」

「医者？ 何にするんだ？」

「子供の加減が悪いです。」

看守はぶつぶつ言いながら出て行った。いくら待っても帰らなかった。

そのうち赤ん坊の呼吸が多くなってきた。母親はもう一人の看守に訴えた。

「すみませんが、医者はどうなったんか見て来て下さい。お願いします。」

看守は取り合わなかった。

「心配するこたないよ。」

四五十分もたった頃ようやくさっきの看守が帰って来ていった。

「警察医はもう帰っちゃったのだよ。」

警察医というものが警察に詰めているものかどうか母親は知らなかった。

「ほかの医者を読んで頂けませんでしょうか？」

「呼んで呼べないことはないがね。金は持ってるか？」

「持ってません。」

「それや困ったなあ。外から呼ぶと金を払わなくちゃなんねんだ。」
誰かが檻房の中からいった。

「金は俺が持ってるよ。」

看守がその檻房の前へ歩いて行った。

「それや君だめだよ。中で金の貸し借りはいっさい許されねんだ。」

「許すも許さないもないじゃないか？ 赤ん坊は病氣なんだぜ。」

「そう君、僕を虐めたって仕方がないよ。」

「虐める？……チェッ！」 檻房の中の男は噛み切れるほど舌打ちした、「どうするんだ、死んだら？」

その時その隣の檻房から父親が言いかけた。

「ちよっと……君……」

そのとき母親が叫んだ。

「呼んで下さい！ 呼んで下さい！」

留置所じゅうが聴き耳を立てた。看守は保護檻を覗き込んだ。赤ん坊の口許に泡が見えた。

看守はあわてだした。連れの看守に何か耳打ちすると彼は急いで出て行った。すぐ医者が来た。

母親や女たちが容態を訊ねると、血が頭に上ったのだとだけいて医者は看守部屋に隠れた。そこへ房外の戸をあけて、意外なことに署長がはいつて来た。もう夜中の一時を廻っていた。署長と医者とは向い合わせに屈み込んでひそひそ話していた。その間が母親に非常に長く思われた。とうとう二人が椅子を立った。母親は彼らが立ち上りながらいろいろの聞いた。

「駄目かね？」

「直ぐ出さなければいけません……」

母親は頭のなかで大きな水車が廻るような気がした。それから手足がしびれ鳩尾の落ち込むを感じた。看守が何かいったが聞えなかった。ただしっかりしていなければいけないとそればかり考えていた。